

恐れるな、小さき群れよ

（ルカによる福音書12：22～34、イザヤ書44：1～8）

今朝は、ルカによる福音書12章22節から34節までの、私たちが現在礼拝で用いている新共同訳聖書では、「思い悩むな」と言う小見出しがついた個所になります。この直前の箇所では、『『愚かな金持ち』のたとえ』が語られていました。豊作に恵まれ、一生かかっても食べきれない程の穀物を、倉を建て替えてまで、溜め込んだのに、その全部を地上に残して、アッと言う間に死んでしまった男の話です。元々、この譬え話は、群衆の一人が突然、遺産相続を巡って兄弟間で争っていたことから、主イエスにその仲裁を求めて、それまで続けられていた主イエスと弟子たちとの対話に割って入って来たことに始まり、主イエスは、仲裁に乗り出す代わりに、却って反対に、彼を戒め、貪欲にこそ注意を払い、用心すべきことを諭すため、彼に対してなされた、言わば、個人的な譬え話だったのです。が、主イエスは、その譬え話を踏まえつつ、今度はまた、語る相手を元に戻して、弟子たちに対し、貪欲に陥らなくても済む道を、つまり、物に執着せずとも、平安に生き得る道を、主イエスに従うが故に、弟子らにも、必ずや訪れるであろう厳しい前途に備え、この機を捉え、愛情を込めて、諄々と、心に沁みる、身近で、平易な譬えをもって、語られました。それが、今日の箇所なのです。

今日の箇所の背景の説明は、これくらいにして、早速、今日の箇所そのものの学びに入ってまいりたいと思います。とは言いましても、この個所は、誰にとっても、聖書の中で一番馴染み深い個所なのではないでしょうか。だから、改めて、わざわざ学ぶ必要はないか、と言うと、そうではないのです。分かっているつもりであったのに、何にも分ってはいなかった、と思い知らされるのが、聖書の学びの常なのです。多くの人々には、今日のこの個所は、ルカによる福音書12章22節以下に述べられている言葉より、寧ろ、これとの平行記事であるマタイによる福音書6章25節以下に記されていて、マタイによる福音書5章1節から始まる“山上の説教”の一部をなしている、こちらの方が、より馴染み深いのではないのでしょうか。内容も表現も殆ど変わりません。でも、違いは歴然としてあるのです。マタイでは、5章の26節で、「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは鳥よりも価値あるものではないか」と言っているのに対して、ルカでは、12章24節で、「鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか」となっていて、マタイでは、単に鳥となっていたのに、ルカでは、鳥一般ではなく、わざわざその種類を特定して、鳥としているのです。これには何か意味があるのでしょうか。日本でも、どちらかと言えば鳥は、あまり愛される鳥ではありません。寧ろ、ごみ箱をあさり、折角綺麗になっている所を、辺り一面ごみを散らかして、汚くしたり、子育ての際には、強い警戒心からか、通りがかりの人間を襲って、傷を負わせたり、と言ったことが、人間の不興を買っているのですが、ユダヤでは、元々鳥は、律法で、汚れた鳥とされていました（レビ記11：15、申命記14：14）。でも、そんな汚れた鳥と見做される鳥でさえも、神は、養ってくださると言うのです。ただ、養われるだけではありません。列王記上17章4節には、アハブ王の迫害を逃れ、ケリト川のほとりに身を隠した預言者エリヤを、神は、鳥を用いて養われた、ということが記されています。神は、汚れたものとさ

れている鳥をさえ養われるだけでなく、鳥を用いて、神の使命に生きる預言者エリヤを養われもされるのです。神にとって不要なものは、この世界に何一つなく、すべては何かの役に立つため存在しており、だから、神は、何らかの意図の下に、あれも、これも、一切のものを養っておられる、と言うのが、ルカが暗に、私たちに伝えたいと願ったことなのでしょう。彼は、ユダヤ人からは汚れた者と見做されていた異邦人であったにも拘わらず、神に尊く用いられたことを思い、自分を鳥に見立てて、本来、主イエスがなされた、あの「空の鳥を見よ」の所を、敢えて、「鳥のことを考えなさい」と、言い換えたのかも知れません。だとすれば、ここには、ルカ自身の体験、経験に基づく、彼の信仰の証も合わせ語られている、と言うことになります。

次、28節、29節を読んでみます。「今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。あなたがたも、何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない。また、思い悩むな」。ここで、「思い悩むな」と訳されている原語は、“メテオーリゾー”で、それは日本語では、普通、“落ち着かない”、“ぐらぐらする”、“あくせくする”等々に訳される言葉で、しっかりした拠り所を持たないか、たとい、持っていたとしても、その拠り所自体が、頼りなく、ぐらぐらしているため、それに依り頼む者も、それに合わせて、ぐらぐらしている、と言うことなのかも知れません。いずれにしても、不安が落ち着きを失わせ、何時も、何かに急（せ）き立てられているようで、浮足立たせ、あくせくさせるのです。そうした状態が、どうして起こるのか、主イエスはここで、「信仰の薄い者たちよ」と叱咤し、それは、信仰の薄さに起因している、と、暗に告げられるのです。でも、一体信仰とは、薄いとか、厚いとか、重量や体積があって、物差しや秤で、測れるものなのでしょうか。信仰とは、ただ、信じるか信じないか、と言うだけのことであって、重量や体積など、あるわけがありません。でも、確かに、偉大な信仰と言うものはあります。例えば、モーセの信仰です。では、偉大な信仰と言う場合、それはどのような信仰を言うのでしょうか。それは、神を、偉大なお方として、額面通りに信じ切り、また、信じ抜き、実際に、信じているその通りに生きる信仰を言います。

私たちは、使徒信条を礼拝の度毎に告白しています。その冒頭は、「わたしは、天地の造り主、全能の父なる神を信じます」と言う告白です。でも、果たして、私たちは、本当に、ここで告白されているように、神を、天地の造り主、全能の父なる神だと、心底、信じているのでしょうか。以前、「あなたの神は小さ過ぎる」と言う題名の本がありましたが、口では、「天地の造り主、全能の父なる神を信じます」と、告白しながら、実際は、神の実力を見くびって、小さいものに、余りにも小さいものにしてしまっているのではないのでしょうか。そこに、不安の原因があるのです。神を信じて、結局は、信じないのと大して変わりはない。でも、ちょっとばかりは力になるかな、と言った程度の、ほどほどの信じ方でお茶を濁している、と言うのが、多いのではないのでしょうか。でも、主イエスは言われるのです。神を侮ってはいけません。このお方を、偉大なお方として、額面通りに信じなさい。その信仰が揺るぎないものとなる時、あなたには確かな拠り所が生まれ、最早その時には、“落ち着かない”、“ぐらぐらする”、“あくせくする”と、言うようなことはなくなるのではないかと、主イエスは、そう言われるのです。

次ぎ、30節、31節を読んでみましょう。「それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる」。人間は食べなければ、また、飲まなければ、生きてはいけません。昔、日本の武士は「武士は食わねど

高楊枝」と言って、瘦せ我慢をし、詰まらぬ見栄を張りました。その伝統を受け継いだ戦前の日本の軍隊は、太平洋戦争の折り、精神論を説いて、多くの兵隊を餓死させました。天の父なる神は、そんな非現実的な精神論など説いたり、強いたりはない。「あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである」と、主イエスが言われる通りで、主イエスもまた、主の祈りの中で、欠かせない祈りの一つとして、「日用の糧を今日も与えたまえ」と祈るよう、お教えになりました。でも、そうは言うものの、人間食べ、また、飲んでさえいけば、それで十分か、と言うと、そう言うものではない、と主イエスは仰います。確かに、天の父なる神を知らない異邦人は、まるでそれだけが人生のすべてでもあるかのように、食うために生きる人生に没頭します。でも、天の父なる神を知っている者は、そうであっては行けないと、主イエスは戒められるのです。では、どう言う生き方が求められるのか、と言うと、物には順序と言うものがあって、先ず、第一に求むべきは、神の国だと、主イエスは言われます。神の国とは、正義と愛に基づく神の御支配のことです。それは神の御子・主イエス・キリストの到来によって、開始されました。今は目に見えない形で、世に広がりつつあるのですが、まだまだ完成には程遠く、だから神の国の住人とされたキリスト者たちは、主の祈りに於いて、「御名が崇められますように。御国が来ましように。御心が天で成るように、地でも成りますように」と祈りつつ、御国、つまり、神の国の完成を待ち望みながら、待ち望む者に相応しいく、良き神の国の証し人として生きるのです。これこそが、人生の究極の目的で、キリスト者は、そのために生き、否、そのために生かされているのです。そこで、神が生かそうとされる限り、生きるに必要なものは必ず与えられる、と言うのが、キリスト者の揺るがぬ確信となるのです。オリゲネスは、こう言ったそうです。「より大きなものを求めなさい。そうすれば小さいものは加えて与えられるでしょう。天上のものを求めなさい。そうすれば地上のものは加えて与えられるでしょう」と。これが道理と言うものではないでしょうか。

次ぎ、32節で、主イエスは、こう励まされます。「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」と。この励ましの言葉は、直接的には、目の前にいる12人の弟子たちに向かって語られた言葉です。事実、本当に小さな群れでした。一体、彼らに何ができると言うのか。神の国云々とは、チャンチャラ可笑しい、と、当時の誰もが思ったことでしょう。やがて、イスカリオテのユダが脱落した後、残った11人の弟子らが中心となって教会が誕生しました。でも、まだまだ小さな群れでした。ルカが、このルカによる福音書を執筆した紀元80年代だって、教会は、どこの馬の骨か、と言われるような小さな存在でしかありませんでした。でも、主イエスは、そこに宿っている神の国の種子は、やがて大きく成長し、必ずや大樹となり、神の国は確かに成就し、実現する、と約束されたのです。かつて奴隷の民であり、数に於いても、力に於いても、あらゆる面で、真に小さな群れに過ぎなかったイスラエルの民は、神の約束を信じて、エジプトを脱出し、シナイの荒野を40年も放浪すると言う、思わぬ回り道はしたものの、でも、確かに、約束の地、カナンに入ることができました。神の約束に間違はなかったのです。そのように、古いイスラエルに対し、約束を果たされた神は、新しいイスラエルである教会に対し、どんなにそれが小さく、力ないものに見えても、必ずや「神の国をくださる」と言う約束を果たされるのです。未だに小さな群れでしかない日本の教会に対しても、主イエスは、「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」と、そう言って、励まし続けてくださっているのです。

最後に残った33節、34節を読んでみましょう。「自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、

盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ」。「天に宝を積みなさい」と言う、この主イエスの勧めの言葉は、大変に誤解を生み易い言葉です。「死後、天でよい報いを受けるため、日々善行に励み、うんと功德を積んでおくように」と言う、勧めのようにも聞こえるからです。そうすると善行も、自分を救うためのエゴイステックな業になってしまいます。その意識が前面に出て来ると、折角の善行も、いやらしいもの、醜悪なものになりかねません。たとい、そうはならなくても、エフェソの信徒への手紙1章8節で、「あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です」と言われているように、人が救われるのは信仰によるのであって、行いによるのではない、と言う、福音の根本的な理解が崩れてしまいます。では、私たちは、この主イエスのお言葉を、どう理解したらよいのでしょうか。コロサイの信徒への手紙1章5節には、「あなたがたのために天に蓄えられている希望に基づくものであり、あなたがたは既にこの希望を、福音という真理の言葉を通して聞きました」と述べられていますが、既に、天には、キリストによって、私たちに必要な富は、蓄えられているのです。まだ、それに不足でもあるかのように、私たちからも、それを補うため、何かを加えねばならない、と言うようなことは、金輪際ないのです。何故なら、主イエスが、私たちのために天に積んでくださった宝は、完璧で、十分過ぎる程に十分だからです。では、私たちは、天に蓄えられている宝は完璧で、十分なのだから、最早、何もしなくてもよいのか、と言うと、現実には、そうはならないのです。と言うのは、恵みの余りの素晴らしさに、本当に目覚めた者は、もう、じっとはしておれなくなるからで、恵みに応えたいと、体が一人で動き出し、善行に励まざるを得なくされるからです。

善き行いによって救いを得るのではなく、救われたからこそ、喜びと感謝に満たされて、お救いくださった主イエスに倣い、自ら進んで、義と愛の業に励む者にされて行くのです。実に、そこにこそ、「善き業への自由」と言う、真のキリスト者の自由があるのです。

(三輪恭嗣)